

Diploma Interview



Shuhei Hirooka



Toshimitsu Minami



卒業設計によって遠くまで飛ぶ

(永長) 今回南先生と廣岡先生の対談形式にさせていただいたのは、2年生の課題でお世話になったお二人という経緯になります。まずは、卒業設計の総評をいただきたいのですが、南先生は中間講評にも出席されているので、僕たちの経過なども踏まえてお話をいただけたらと思います。廣岡先生はオンラインで見られていたことですので、対面の先生方とは気になった作品などが変わるかもしれませんが、よろしくお願いします。

(南) 僕は講評会の時にコメントした通りなので、今の質問だと中間からどういうふうに変ったかとか、そういうことについて言うのがいいのかな。あんまり中間から変わってない人が多いなあというのが正直な印象で、そういう意味でも講評会で卒業設計が評価されたかされなかったかということよりも、この人はこの後伸びると思ったのは寺西さんかなあ。ああいうふうにものを壊してつくっていくっていうようなことを経験したことは素晴らしい。彼女は中間とかに限らず毎回、一回ゼロから考えるみたいなことをやっている。みんなは、肉付けみたいなのをしたり、リサーチをしたりしていくんですけど、建築もしくはつくるものの自体のスタディを重ねた結果生み出されたものっていうのを感じた作品ってあんまりなかった。寺西さんがつくったものは、最終的なものはまだその途中という感じがしましたが、「スタディ」し続けたすべてを含めて素晴らしい卒業設計だだと思います。もう一つ個人的に良かったと思っているのは、前本くん。彼の場合はどちらかというと提案を変えないと

いう方向でやっていたんですけど、最後までいろんな人から言われても変えなくて、出来上がったものもすごい良いなとは思わなかったけど、よくよく話を聞いてくと、「自分が最後につくったものは自分がやりたかったことはできなかったんだけど、やりたかったことは『建築をつくることで街とか地域がつくられる』っていうことをやろうとしてる。」ということに気づいたみたいで、卒業設計をやって気づきがあったということは結構大きい。はっきり言って卒業設計で評価されて賞を貰うこと自体よりも、卒業設計が終わった後にそれによってどのくらいエンジンというか、飛べるかっていうのが結構重要なことなんだろうなと思っていて。そういう意味で今言った二人はこの先に飛べるために十分な卒業設計だと思いました。一先ずそのくらいで。

(永長) ありがとうございます。

(廣岡) 僕は当日風邪の影響で現地に行けなくて、オンラインで見えていたんですけど、そもそもオンラインであの講評会を後輩たちに見せるっていうことに対して、先生たちの評価が、どのポイントにあったのかが全く伝わらないな、というのが一つ思ったことです。僕自身も相当誤解して見ちゃったということがあります。おそらく多分プレゼンテーションがZoomで、パワーポイントを用意して発表していたらもうちょっと違う伝わり方をしていただけれど、手振れしまくっている動画を見ながら、模型も解像度が荒い状態の動画で見て、声も途中で遠くになって聞こえなくなるっていうこととか何度か起きて、ほんとどわからないっていう印象がまずありました。それは運営であるこちらの不手際もちろんあるし、そもそもオンライン用に向けて皆さんがプレゼンを作っていない

ら、現地に行った先生と僕とかオンラインで見えた人たちは相当評価が割れてると思います。そのような状況でも、全体的に非常に面白かったなと思っていて、中間は見えないし、2年生からどう育っていったかっていうのも全然見てないから、あ、こういうことをしていた人たちがこうなったのかっていうことの驚きももちろんありました。さらに、その驚きよりも増して考えているところが面白かったなと思っています。具体的に街を見ているっていうこともすごい伝わってきました。街の中でどうやって建築が建っていくかを考察して、ただただその建築自体がヒロイックに建つっていうことだけではなく、それが街にとってどんな存在かということをやちゃんと考えようとしている。そういう時に暴力的な人ももちろんいたけど、ちゃんと街を見ようとしているということとか、丁寧に建築する街に対して今自分がどうアプローチするのかっていう、現在あるものに対するリスペクトがかなりの人たちからすごい感じとれ、僕としては好感を持っています。ただ卒業設計として、オンラインで見えたときにある種のわかりやすさみたいなのがすごい目について見えてしまうっていうのが気になりました。僕は、宮本くんの円の、あの場所選び、あの敷地の大きさであの円があるっていうこととかはすごいわかりやすく見えました。他にも神原さんの提案とか、上田くんもその時はわかりやすく見えたな。なんとなくやろうとしたことが非常に共感できたなと思ってますね。逆を言えば、今回吉原賞をとった河野さんの提案か、全然オンラインでは情報が分からなくて。おそらく円錐会賞の選考会のために皆さんから資料を集めていて、河野さんの言葉の力と模型っていうのがすごく情報として強かったんだらうなということを振り返って思います。もちろん他の人たちが図面からすごい強いものを感じた瞬間とかあったけど、図面の密度や

完成度抜きにして考えた時に、河野さんの言葉はとても伝わってきて、共感しました。その言葉の威力というか持っている力みたいなものと考えているものが連動してZoomでも伝わっていたり、あるいは、ある種のわかりやすさみたいなのが形として示している人たちはこちらとしても受け取りやすかったなと思っています。皆さんの考えていることと、僕ら受け取った人たちはZoomだとずれてたなというのが印象だと思いますね。

『まちの文化と記憶を紡ぐ建築』寺西通夏→p20

『渋谷の砦』前本哲志→p162

『中洲』上田成夢→p36

何に向かってやっているかを常に考えるべき

(永長) ありがとうございます。もう一つ卒業設計に関してお聞きしたいことなんですけど、今年の学年はどちらかというと同じような興味を持っている人が多かったなという印象があつて。風景とか、地形と建築がどう関わるかとか、建築と道がどう関わるかということについて考えている人が多かったと思います。前期はコロナの影響もあって、各々が家でやっているという状況がある中で、けど興味を持っている方向性は似ているっていう部分があつて、それはうちの学年から都市科学部になったという影響ももしかしたらあるかもしれないし、そのようなことについて思うことがあればお聞きしたいなと思うんですけども、いかがでしょうか。

(南) 建築自体への興味は年々減っているように感じます。良いか悪いかは別として。

(廣岡) 僕は、都市科学部になったからっていうことを実際分からなくて。僕は横浜国大にはY-GSAから学生で入ったので、似てる部分もちろんある。僕が学生の時から、現在と、街の分析とかもちろんずとしてきてるし、その文化自体は昔からあるような気がするけど。2年生の時の印象が僕の中では非常に強く、2年生の時って街の分析とかは全然考えてなくて、みんな暴力的なもの作ってる印象があつて、その片鱗が見えてた人もいたため、変化はそこまで感じてなかった。ただ拾ってくる情報の密度が10年前と違って、卒業設計をやるときに4年前期でやったことを持つてくる人がすごい増えるんですよ。10年前はそれはほとんどなくて、ある種タブー視されてた感じがしたんですよ。僕の二個上の先輩が前期と同じ課題を持って行って、その同じ課題で同じような内容をそのまま提出したんですけど、それに対してすごいクリティークされていて、同じ敷地で似たようなことをやっていることが良くないっていうことを言われてたっていうことがあつて。さっきの南さんがおっしゃるような、あんまり変わってないっていう印象が、教育上リサーチにかけられる時間というか、その場所をちゃんと見る時間がすごい増えるから、そりゃ解像度が上がるだろうというのはもちろんあつて。ただその割に全然模型とかで周辺とか白のポリウムで作っちゃってる人がめちゃくちゃいて、それってなんなんだろうね。上田くんはスケッチで立面書いてたじゃん。あれは街をちゃんと見ようとしてる。リサーチとして形として見ようとしてるっていうのは非常に分かったけど、そういう片鱗が見える人もいれば、ただただ白い箱になっちゃったとか、地形もなんだかんだかすみ草をだーっと植えてて本当にこれで街を見たと言えるのかっていう人もいて。一年間かけたとしたら、もう少しその解像度を上げれないと

リサーチとしては足りてないんじゃないのっていうことも思ったし、その逆に前期と後期を半分で分けて教育上設計するっていうトレーニングをもっとでもいいんじゃないかなーかなーと思ったし、両方とも良い面悪い面見れたなという感じがしてます。でも都市科学部の影響ということではないように感じます。

(永長) 去年の学年の方と比較するのは違うのかもじゃないけど、上の学年と比べるとうちの学年って、やっぱりみんな同じ興味を持ってる部分はすごい多かったかなと、都市科学部かどうかは分からないけど、思いますね。

(南) リサーチの仕方とか調べ方がより一様になっていてるっていうのはやっぱりあるかなと。時代が変わって、いろんな情報を得やすくなったことと、リサーチがしっかりできるようになったというか、褒め言葉で言ってるんじゃないくて、均質化され、みんな同じことばかりやっていていいのかなっていうのは思ったかな。その上で本当かなって思うのは、「こういうことが起きてます、それに対してこういう提案をします」というときに、例えばリサーチを通してうまくいってないところをこうしたらうまくいきますみたいにして、答え合わせの根拠やものづくりの理由をリサーチに求めたものになっている。場合によってはそれがあたかも正しいという様な説明のものも多々ある。もう少し建築をつくることにおいて、個人的なことだったりここにこういうものがあることでその場所が豊かになるんじゃないかというような考え方があってもいいんじゃないかなーかなーと思いました。リサーチをつくる理由にするのではなくて、あくまでそこから発見があつてその元々あった生活も豊かになる……。馴染むっていう話ではなくて、周りの生活がもっと豊かになっていくということかなと思うんですよね。そういう意味では前本くんは劇場をバラバラ作っていたけどほんとには建築を1つつくればよかったなと思ったんですよね。建築1つなんだけどそれが地域のコンテクストとかを変えてしまうぐらいのものを作れたら良かったのかもしれないね。なんでかという、渋谷の文化って様々なんだけど、パルコ1つがつくった文化もすごい大きくて、パルコはパルコを渋谷にいつぱいつくったんじゃないくて、パルコ1つをつくって若者のファッションとか若者文化の発信の象徴ができたことで渋谷という街が変わっていったというものもあつて、そういうって建築ができる豊かさの一つだと思うんですよね。まちを全部良くしようと思ってバラバラいくつづける提案もだめじゃないと思うんだけどよくありますよね。リサーチをしてまちのことを知るとなんとなく「全体をつくっていかなくてはいけいないんじゃないか」ってなってるのをよく見かけるけれど。まちへの接し方でもっと色々あるんじゃないかな。僕の地元の近くで言うと、金沢

21世紀美術館なんかは一つの美術館なんだけど、それでまちはすごく変わったし、空気が変わった。これは21美ができる前と後を知っている地元で育った身だからかもしれないけど、そういう建築のあり方があるってことはみんなにもちゃんと理解してほしいなと思います。そう言う意味でリサーチをして地域を知るって言うことはすごくいいんだけどそこから建築をつくるっていうつくり方が一様な気がしますね。

(廣岡) リサーチっていう言葉の中に、みんなが思い描いているこういうものだろうっていう共通している型みたいなのがあって……。例えばスポーツでは実際に使わないけどバレーボールのこの瞬間のこの動きを練習するみたいな、やったりするじゃん。空手とか。そういう形式的なことに対して、何に向かってやっているのかということを考えるべきなんじゃないかと思うんですよね。この型式的なリサーチで問いや向かう先は見えるのかというふうに。僕は南さんの卒業設計すごく好きなんですけど、大きいってすごいってことをずっと言ってる。大きさって何なんだってことをただただ問い続ける。それを形にして自分がどう思うかを表現する。その当時学生だった僕らにそのテーマをただただ探求するっていうことはすごく面白いことだなあと思いながら見ていたんですね。今の話も例えばまちに対して今こうだからこうやりましたっていうことだけじゃなくて、普段生活してる実感の中で見てくるような、こうしたら便利だなとか、あるいは大きいスケールであってもこうあつたらすごい面白いのにもってものに目を向ける。そこがスタディっていうものと混同して感じられるのだけれど、リサーチとスタディっていうのは常に運動していて。その中での仮説のプロセスとか、それを試行してみてもうなのかっていう時にただただ豊かになるよってということじゃなくて、それに問いを何度も重ねていくと豊かさとは何かっていうような起源に近づいていくと思うんだよね。何かを提案する時には設計側からは良いように見えているんだけど、実際使う側からみたらそもそも豊かなのっていう考えを持っている人もいるから。その人たちに対して豊かとはなんだ、家ってなんだ、建築ってなんだ、生きるってなんだとかそういう問いに向かっていくことがすごく大事だと思っていて。その思考のプロセスが過去のリサーチを参照した形式化したリサーチでは疎かになりがちだなというのは感じています。卒業設計とか学校の課題とかって軽けてもいいから自分がどういう心持ちで過ごせた時に豊かさを感じれるのか、あるいはその考え方が他者にとってどういうことなのかってことを検証することが哲学的な話になっちゃうけど。建築をやっていてそういう時に学問的にアプローチできているなと感じる瞬間だったりするので、そこら辺のことをスタディやリサーチの中にただ



ただ見る、観察するってことだけじゃなくて、自分の実感や考えを当ててみてそれでどうなるのかってことまでを含めてリサーチ、スタディと考えたらいいんじゃないかな。作っているものが全部正しいわけではないし、正しいってこと自体が善ではなくて、正しいことが暴力になることだってあるわけで。ひたすらそうやって問いを立て続けて、なぜ自分がそれに興味を持っているのかを言うようにする。これは卒業設計だけでなくで生活する上でも全てにおいて大事なことかなと思います。（永長）ありがとうございます。次は少し話が逸れてしまいかもしれないんですが、この一年を通して、コロナの影響で学生同士や卒業設計を含め建築との関わり方が大きく変わって、学生としても考えさせられることが多々あったのですが、コロナという環境も含め、今年を振り返って一番に思う事など聞きたいのですが。

卒制を人が人に直接伝える場があることの尊さ

（南）僕が助教になって、今年これだけは何としてもやりたいと決めていたのは、卒業設計の講評会は対面で行うこと（行えるようにすること）でした。皆さんには実際講評会をやる前にちょっと話をしたのですが、実は一年前から準備していて、皆さんが4年生の最初の課題をやるゼミぐらいから、新型コロナの影響で基本的にオンラインってということが決まっていて、その時点ではもちろん卒業設計もオンラインという状況でした。それで6月ぐらいから場所を探して、学務係とか上の方に掛け合って、経済の2号館とか教育文化ホール、あといつもの図書室横のメディアホールの三箇所にて事前に見学に行くて、6、7月ぐらいに事前に予約を入れて。どういう状態だったら感染を防ぎながら対面でできるか検討を重ねました。最後に日程が近づいてきて、もう一度感染者数が増えてきたときにほんとに対面でやっても大丈夫なのかという意見もありましたが、基本的には対面でやりますっていうことは言い続けました。いろんな方々から、安全ですか、どういう体制でやるんですか、っていういろんな意見も来ていたんだけど、それもそのつど対応しつつ、卒制の講評が対面で行われることの重要性を話しつつけました。より安全をみて一週間から二週間前とかに会場がパワープラントに変更して実現しました。当日来られた方々の中にも、ほんとにやっていたいのかと思っていたいらした方々もいたとは思んですが、僕が4年生にできることはこの場を守ること、対面で人にものを発表する、伝えることが、どれだけ尊いことかっていうことを一番感じられた学年だなと思うし、その人たちにとって、最後に発表すること自体は卒業設計が上手いかったいかんにかに関わらず、すべての学生にとってすごい貴重な機会なんです。卒制の講評がそのものがある場で人と人の間でおこなわれること、そこではそのときにしか得られないものがある。そこで感じるものはその人を変えることすらある。コロナがあったから今年はどうだったかっていうのって、あんまり好きじゃないんですよ。僕コロナになっても生活があんまり変わってないと個人的には思っていて。なんかコロナを理由にしちゃうと簡単なんだけど、コロナだったからうまくつくれなかったっていう人は、たぶんコロナじゃなくてもうまくいかなかった時に、自分の外に理由をおいて逃げる気がするんですよ。例えば会社で働き始めた時に自分にはこういうプロジェクトが与えられないとか・・・。外的要因によって自分の限界を決定してしまうってことをやっていくのはすごく嫌だなと思うんですよ。だから、コロナとか関係なくて、みなさんがやったベストが今の卒業設計だと思

います。そして、対面で話せるとなったときに、結局何を伝えたいかということなのかなと思っている。そのものの説明を超えて、私は結局これ何を伝えたいかということが問われていると思う。それはつまり、その人の生き方をみせることになる。

（廣岡）僕はめっちゃ変わりましたよ。内面は変わったのですが、僕生活自体はそんなに変わってないんですよ。家でずっと作業して、打ち合わせで外出ののとY-GSAへ行くのに外に出るくらいだったので、そこまで変わってなくて、Y-GSAに行かなくなったということぐらい。けれどもそこで他の人たちも同じ状況になったときに、今オンラインでよなよな zoom というオンラインの勉強会をやってるんだけど、ああいうのをやっていくと、今まで関わっていなかった周りの人達とも結構繋がったりできるってことがわかったし、さっきのプレゼンテーションのことで言うと、プレゼンテーションをする機会が圧倒的に建築家でも誰でも減っちゃうなっていうのは思って、西沢さんが以前言っていたのは、喋ってるって自分で気付いてくるんだよねとかって言っていて。自分も依頼されて講演をしてた時に、自分にに向けて喋っていると感じるんですよ。さらにそれを見られているっていうのがあるから、それってすごい尊いことだし、そのような機会をもっと増やした方がいいんじゃないかというのを思って、よなよな zoom をやりだしたりだとか。あと建築家としてはあるまじきことなのかもしれないけど、僕は作業中に動画を見ちゃうんですね。ずっとアニメだったり、お笑い番組だとか見てたものが、4月ぐらいから一気に建築とか哲学とか YouTube で色んな面白い人を見つけてきて、動画を見ています。それも当時見てた土肥真人さんという東工大の社会基盤にいらっしゃる先生なんですが、一昨年 Y-GSA で講演をされて、その方からメーリングリストで面白い人達と対談します、という報せを聞いて、それを見てから自分も面白い方の話をたくさん見た方が有意義だなと思って。ちょうど Y-GSA も横浜建築都市学が全部オンラインになって、面白い方のプレゼンや対談をひたすら聞きながら作業ってなると、1日6時間7時間ぐらい人の講演を聞いているわけなんですよ。その中で、どんどん自分の考え方も変わるし、なぜこの問題をこういう風に捉えるのかとか、俺はその時どう思うのかということや、パソコンで作業してるから Word 開いて聞きとって、重要なものはメモをとりながら、それをずっと考える。考えたことを何日か経って自分の考えがまとまったら Word で自分なりの文章を書く。誰に見せるわけでもないけど。ということをやずっと繰り返して、さっき建築で新しい提案をして街を変えようという話があったけど、街を変えるとか自分以外の他者を変えるのは容易ではなくて、でも自分が変われば、他者への感じ方が

南俊允

1981 年 石川県生まれ
2004 年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
2006 年 同大学院修士課程（小嶋一浩研究室）修了
2006-2017 年 伊藤豊雄建築設計事務所
2017 年 - 南俊允建築設計事務所
2017 年 慶應義塾大学 非常勤講師
2017-2020 年 横浜国立大学大学院 Y-GSA 設計助手
2019 年 東京理科大学非常勤講師
2020 年 - 横浜国立大学大学院 Y-GSA 助教



変わるわけだから、自分を変えるっていうことがすごい大事だってことをよなよな zoom を通して言われました。自分でも納得して、自分の中でこの一年の変化でたくさん人の話をオンラインで、今溜まっている蓄積されているデータも見だし、本もだいぶ読めた。他の学生とも Y-GSA で教えるときに、普段だったら多分普通にエスキスするだけだったのが、1時間だけ俺と学生一人が、新建築データなどで公開されていたものを使って、例えばラルフ・アースキンの住宅はどういう寸法でできていて、それがどう感じられて、それがなぜそういう寸法で決まっているとかっていう議論をする時間を1時間程作ったんですよ。そうすると前川國男のスケールの話と、丹下健三のスケールがどう違うのかというのを学生と共有できる。スケールっていうのが言語としてここまで優秀だということを、対面で会っているときはなかなか話せなかったけど、画面越しに図面を見て図面に対してこうあってほしい、こうあったらいいんじゃないのっていうことに対しての感受性が生まれてくる。教えていた学生は最終的に図面をすごくかけたので、良い教育方法だと思いました。普段だったら絶対にしなかった勉強会をやりだして、金曜21時からヘルツベルハーの読書会と、構造主義に対しての見解をどうやって捉えていくかということや、学生と話していて、それによっても自分の考え方がすごい変わったし自分でも調べたことをプレゼンするっていうのが出来たっていうのは大きかった。実は普段移動で取られていた時間とか、みんなも何か夜21時とかに打ち合わせ入れるの失礼みたいな感じあるけど、21時からでも zoom だったら別に勉強会でできて、2、3時間話せるわけだから、時間の使い方も変わったし、教え方も変わったし、見ている情報量も変わったから、自分の中ではすごい良い影響だった。またそれが周りの人達にとつて、もしかしたら情報が閉ざされたように感じられたり、知に立ち向かわない人たちもいると思うけど、仏教的な考え方だけど、できない人すらもちゃんと教えるような、勉学に励みたいと思える環境だったりとか、勉学っていうのはこういう状況でも面白いんだっていうことを伝えなきゃいけないあっていうのはアカデミックな立ち位

置にいる人間としては強く感じました。現在までは、ついてこれない人はついてこなくていいっていうのは、ち自分の中で片隅にあったのかもしれないけど、そうじゃなくてそこら辺のおばちゃんと子供にでも腰を据えてちゃんと話合う。あなたのことをリスペクトするってことをちゃんとやるっていうことに対して真摯にんななきゃいけないっていうことはすごく感じた一年でしたな。

（永長）まずは卒業設計を最後に対面でできて、あの空気を味わうことができて本当に良かったと思います。本当にありがとうございます。



社会に対しての責任と、自分自身に対しての責任

（南）しかも二週間経った後にコロナ陽性者も出ず、良かったなあと思っています。外に学生を立たせていて不憫だっていう意見もありましたが大学としても OK で、対面で実現させるにはこの方法しかなかったんです。人数的に・・・。もう一つあるとしたら30人の先生みんな外に出て学生が中に入る（笑）。なかなか難しいですよ。ただ、コロナ禍になって僕が学んだのは、結局、責任をとる人が全てを動かせるんだっていうのは思いました。それって設計も同じで、何かを実現したいとなったときに、責任がとれるかということだと思うんですよ。責任って二つあって、社会に対しての責任と、自分の人生に対して責任をとれるということの二。それをやったことが、自分の人生とか自分の思想として偽りないかっていう。つくった後に、あれは思ったことと違うなんて言う人は、自分の人生にずっと嘘をつき続けると思うんです。うまくいかなかったものも自分の人生だって言えるくらいのことってそれに責任が持てるかだなと思ってる。卒業設計ってそれが一番感じられるんじゃないかな。うまくいったところもそうでないところも自分っていうふうに思えたら、それはその人にとって、これから素晴らしいかてになるんじゃないかなあと。



（廣岡）南さんありがとうございます。お疲れ様でした。

（南）来年はもうちょっとやれるかな（笑）。けど、たまたまだけど、階段教室みたいなものでやるのがずっと続いていて、発表の場だから、ホールで発表してもらうっていうやり方だったと思うんですけど、今回換気とかの関係もあって、パワープラントでやって、ああいう場所ですって。来年からまた階段のところに戻るのか、もしかしたらああいうところでもう一回、来年は学生も入ってやるとしたときに、あそこにどった返すくらい人が集まるっていうのも素晴らしいのかなって思ったりして。そういう意味では気づくことが多かった、良い一年だったなと思います。

（永長）お昼の時間に先生方皆さんで集まってご飯を食べているのがいいなって。

アイデアは盗めても、その人間の歴史は盗めない

（永長）関係ない話になってしまうんですけど、今年読んで印象に残っている本などはありますか？

（廣岡）僕は、若松英輔さんの「生きる哲学」です。他にもいっぱいあるけど。あとその同じ方が西田幾多郎の善の研究をNHKの100分de名著っていうシリーズで解説している本があるんですね。その二つは特に面白かったですね。あとは、苫野一徳さんという哲学者が自由について書いている本があって、教育学ってすごい面白いなと思った。苫野さんは教育哲学者なんだけど、そもそも自由っていうのはなんなのかっていうことを定義した本で。自由って言った時に自分の意志の自由を考えがちなんだけど、他者から見て自由であっても良いと認めて相互に承認できることが自由だ、と定義したのはすごい面白い。一人で気ままに生きるっていうのは別に自由ではなくて、自由っていうのは誰かにそれを許されている状態っていうのが自由の本質だという話を知ったときに響きました。建築において自由っていうのがただただ重力からも逃れるようなものと考えるんじゃなくてそれを許される状態のことだといえる。例えばふわふわした建築っていうのは地球の重力からそれを許されていることだと思うんですよ。地球から許されるっていうのはどういことなのかを考えられるようになったっていうのは僕の中では本当に目からウロコでしたな。南さんどうですか。

（南）瀧本哲史さんっていう投資家だった人がいて、そ

の人が書いた「2020年6月30日にまたここで会おう」という題名で、以前行った講義をまとめた本です。でもその人亡くなっちゃったんですよ。その日がくる前に。その中に色々な質疑応答があって、ある学生が「すごい頭のいい人達が集まっているから起業する時に自分が仲間を見つける時に、自分のアイデアを教えると誰かにパクられて盗まれるかもしれないじゃないですか。」という質問したんですね。それは多分近いこともみんなも思っていて、自分が製図で課題とかしていた時に、隣の人が見に来ると隠しちゃったりして卒業設計の講評会とかが近くなるとあんまり見せなかつたりするんだけど。それに対して瀧本さんはアイデアみたいなのっていうのはそんなに真新しいものではないって言うんですよ。アイデアがどうかっていうよりも、その人間がどうかだって回答していて。それで瀧本さんは、唯一盗めないものがあるって言うんですよ。アイデアは盗めても「その人間の歴史」は盗めないよ。という意味では河野さんの卒業設計は素晴らしいなと思った。そういう環境で育った河野さんだからこそ、この街は私の実家っていうことがあらわれていて、それって河野さんにしかないものだから。例えば他の人がああいう街で思いついたもの考えたとしても多分同じものにはならないし価値は違う。その人が持つ物語が入ってこないから。

『いつまでも、この街は私の実家』河野美紀→p60

（廣岡）ありがとうございます。

自分を気づかせるプレゼンテーション

（藤澤）表現の仕方について聞きたいんですけど、プレゼンテーションをボードでやるときにドローイングなどの表現が自分は圧倒的に足りていなかったなと思って。自分の設計を相手に伝えるということをあまり意識できていなかったなと感じて。南さんと廣岡さんが建築をどう伝えるかっていう時に、何を心がけているかを聞きたいです。

（廣岡）僕はまずプレゼンテーションっていうのが自分を気づかせるプレゼンテーションがあると思っています。話したり書いたり見ている時模型作っている時もある種のプレゼンテーションだし。他にもしゃべっていて、しゃべっている最中に西沢さんの顔が曇っているってみんな瞬時に判断しているじゃない。自分で絵を描くということもそれ自体が自分に対して何か訴えかけてきているものだからまずそれを感じながら書くということが大事だと思うし。他所から持ってきたものをただただ真似してコピーでできた言うんだったら、そのコピーしている中で何かしら考えたりしていることがあって、それが絵の中に現れているかどうかをちゃんとチェックしなければいけないですね。例えばトレースとかを課題の中でやったりすると思うんだけど、何でこの図面になったんだろう、何故にこういう表現をしたんだろうとか、何故このアングルで写真を撮ったのかと考えながら書いたりする。自分がここで言いたいことと、ここから見えてくるものは何だったんだろうっていうのを考えながら書くっていうのがすご



い大切で。自分を説得させていく。自分を説得させていくってことは少なくとも自分はわかるわけだから、自分を捻じ曲げずにまっさらで見た瞬間に自分がそう思えるかっていう、自分自身を引きでみることを毎度毎度やれば大丈夫かな。パースや絵が綺麗かどうかということではなくて。絵は絵だから、それが実現するわけではないから。プレゼンボード文字の大きさなんかも、相手に伝わるように書くとか。常に自分が書いたものをリセットしながら見続けることが必要だと思う。表現の中で、スタジオに必要な模型であったり図面にただただ箱だけを書いていると、たとえ自分の頭の中で考えていても他の人から「これ何に使うの?」と突っ込まれてしまうから、頭の中で想像をして人がどう動くかななどを図面に書き入れるということが、自分を騙さずに正直にやるということだと思う。綺麗かどうかではなく自分と相手に伝わるかどうか、これが大事なことなのではないか。

(藤澤) 伝えたいことがたくさんある中で、それらを同列に表現してしまうと(先程おっしゃっていたように)文字のポイント数が小さくなってしまいう気がしています。プレゼンテーションをする時は伝えたいことを絞ってそれを大きく表現した方が良いでしょうか?

(廣岡) ドローイングも言語であるから、模型や平面図でちゃんと示されていたら、「ここはこういうふうに使われる」ということを強くプレゼンテーションしなくても、模型を見てもえれば伝わる。例えば「僕はガソリンスタンドで働いています」ってずっと言っている人はいなくて、それと一緒に見たら働いていることがわかる。だから、他者が見てわかる状態にすることと自分が描いたプレゼンテーションの中から何を受け取るのか、そこまで考えて欲しいと思う。先の例のガソリンスタンドで働いているということに加えて、その人は日なたに出ていて椅子に座って休憩をしているってということが表現されていると、日なたが気持ち良くて、このプレゼンテーションでは光が明記されていないけれどすごく重要であるということを感じるかもしれない。自分が描いたプレゼンテーションと他者から見た視線を行き交うということがプレゼンテーションの中では大事なかもしれない。だから、ただただ綺麗なものだけを指さずに、的確に自分の考え方を補強するプレゼンテーションがいちばん大事なものだと思う。

(南) ぢやぢやしているのは自分らしさでいいと思うけれど(笑)。さっき廣岡さんが説明してくれたように、僕が卒業設計でやったことは「大きい空間は豊かだ。」ということでした。自分がどういいう人生を歩んできたか、20年間生きてきたことを卒業設計にしたいと考えていました。僕の実家が片田舎のお百姓さんの大きな家で、40畳の部屋があったり、部屋も40くらいあっていていたんだけど、東京に来て六畳一間で生活し始めて建築計画学を学ぶと、○LDKとか、いろんな寸法はこうだとか習うんですが、ぜんぜん自分が生きてきた中で感じていた豊かさや違ったんですね。計画学の方ではこの寸法でこうであれば快適だと教えられ、でも一方絶対実家の方が気持ちが良いと思ったり。それで四年間色々学んだ結果、やっぱり自分の生きてきた中で感じた豊かさを問うてみたいと思った。卒業設計では「大きい」しか言わない。今思うとかなり口べたな学生でした。その後、仙台デザインリーグに出して最初の第一投票では1等だったのだけれど、次の審査ではディスカッションがあり、最終的に1等になったのは友達だった東大の学生でした。東大はプレゼンテーションの練習もするので話し方が面白くすごく勉強になる、それで思ったことは、僕は「大きい」ということしか言わなくてひたすら「ここは大きいから気持ちが良い。」というふうに。一方一位になった学生は、その良さをいろいろな角度から伝える。例えば、「ここはこういう構成をしていて良い。」といえ「ここを体験した人はこう感じる。」みたいなことを言ったり。それで帰ってきて、研究室の先生だった小嶋さんに話したら「まあ、そうだよな。(一つのことをひたすら伝えることは)良いことでもあるんだけど・・・。」と言った後、原さんから小嶋さんが教わったことを教えてくれたんですね。「説明する際に一つのことを五通りの伝え方をする」と。それは五通りということが重要というよりは、伝えることにおいていろんな相手がいているんなおもしろさがあるってことだと分かったのは働き初めてからでした。と藤澤くんのプレゼンテーションがゴチャゴチャする時に、例えば、一つのことを何通りかの表現で示しているのだとすれば良いことだと思う。恐らく、ゴチャゴチャしてしまう時に、図面を書かなきゃいけないとか模型を作らなきゃいけないというように、提出物として必要なフォーマットの中に無理やり押し込んでしまうから、ゴチャゴチャと感じてしまっているんじゃないかな。その一つ手前で自分が何をした



NHK BOOKS
1218
「自由」は
いかに可能か
社会構想のための哲学
吉野一徳



いのかとそれをどうやって伝えるのかを整理するといんじゃないかな。図面や模型について悩む手前で、自分のやりたいことをどういう物語としてつくるのかを考えると、プレゼンテーションの意識も変わっていくと思う。

(南) 今年度、初めて助教をやってみて、変な意味じゃなくて学生ってかわいいなと思った。「こいつめんどくさいな」と思うんだけど、成長した姿を一年を通してみると人間っていいなと、それは全4年生に対して思いました(笑)。めんどくさい人にはああだこうだ言っちゃいけない(笑)。一人ひとりに人生があつていいなと。みんなそれぞれの道に進んでも頑張ってる下さい(笑)。

(一同) 本日はありがとうございました。

(聞き手) 上田、河野、榊原、永長、藤澤

